
悲壮記憶 - ひそうかいり -

斎野みなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲壮記憶 - ひそがかいる -

【Nコード】

N8421Z

【作者名】

斎野みなみ

【あらすじ】

僕はどこかにいた、はずだった。 どこかにある隔離された国「Bliss」そこには大勢の人が平穏に暮らしている、と思っただけだった。そして国を指揮する政府「Genocide」では裏で秘密結社がうごめいて……。約束を果たすために国を駆ける少年と、約束を信じ続け、命を捧げ眠りにつくろうとする少女のラブストーリー。

『記憶の欠片』（前書き）

とても拙い小説ですが、どうかよろしくお願いします。

『記憶の欠片』

僕はどこかで、何か大切なことをしていた、はずなのに

闇。どこまで行っても闇だった。

「ウラルツッ!!逃げなさい!!」

その中で誰かが、女の人が僕の名を呼ぶ。だが、闇。

(ここはどこ?僕の名前を呼ぶのは誰?)

「うう、ウラル兄さん・・・怖いよ・・・」

誰か、幼い子が僕の足を引っ張ったような気がした。下を見ても、やはり何も見えない。

(まったく、うるさいなあ。僕を寝かせてよ・・・)

「ウラルー!!朝だよ!!起きなっさくい!!」

「うがぁ!!」

朝っぱらから、なぜは僕はこんな声を出さなきゃいけない。原因は決まっている、カナだ。

「あゝもう!うるさいな。起きるってば」

ゴソゴソと僕が布団を跳ね除け起きると目の前の少女はお母さんかのように、満足げに頷く。

「うむ!よい!!」

「ってか、朝からお腹蹴らないでくれる?夢、忘れちゃうじゃん」
ブツブツと小言を言うと、少女は首をかしげ聞いてくる。

「そんなに忘れたくなかったの?その夢?」

何気なく言われ、僕は何故か戸惑った。そんなことは思ってもみなかった。

「分かんない・・・」

ただ、忘れてはいけなかったように思えた。

「あら、カナ。ご苦労様。ウラルも早く顔を洗ってきなさい」
「はい」

僕、ウラル・カンターレは洗濯中だった寮母のブルガナさんに言われ、洗面台へと足を向ける。カナこ　と、カナ・フューガルは労ってもらい、嬉しそうだ。そう、ここは学校並立の寮。僕が通っている学校「国立第三京郭高等学校」は全寮制で、ここは「第四月寮」寮母のブルガナさんが、150人の寮生の面倒　を見ている。今日は休日なので遊びに出かけている生徒が多いのだろう。人影があまりない。顔を洗い、朝食の席に着くと、ふと思う。

（今朝の夢どなんだったけ？真っ暗なことしか覚えてないや・・・）
何気なく今朝のことを思い出そうとするが、全く思い出せない。忘れてはいけない気がしたのだが、覚えてないのは仕方がない。僕はあまり気にせず朝食を口に運んだ。

『欠片と夢』（前書き）

第二章という題目です。感想やアドバイスをお願いします。
ちなみに、Twitter始めました。 s a i n o | m i n a

m i

『欠片と夢』

それから、何度か同じような夢を見た気がするが、やはり覚えては
いなかった。そして、1週間が経ち、学校の校庭では黄、赤、茶な
どの色とりどりの葉が舞う季節、秋へと移り変わっていた。そんな
綺麗な校庭を下校していると・・・

「ウーラルッ君！！あつそびつましよ！！！」

秋という綺麗な季節にやられた能天気バカがここに1人。カナしか
いないが・・・

「遊ばないっ！！！」

いつもは出さなくらいの大きな声で叫んだ。周りを歩いていたら他
の生徒もビククリしていた。カナもちよつとビククリしていたが、
おかまいなしに続ける。

「なんでなんで？綺麗だよ？遊ばなきゃ！」

「紅葉は見るものでしょ！子供じゃあるまい
急に黙り込んだウラルにカナは恐る恐る顔を除く。

「おーい・・・ウラル？どうしたの・・・？」

ウラルの目はまるで、この世界を見ていないのようになどどこか遠くを
見ていた。それは、驚くものを見たかのような顔で

「・・・子供・・・小さい・・・夢？」

そう、確か夢の最後はいつも小さい女の子の声で・・・僕の足を掴
んで・・・

「うわああああ！！！」

ウラルは手を振り回し、暴れた。まるで、何か恐ろしいものか
ら逃げるかのようなそんな怯えて顔で・・・

「いやだ・・・いやだっ！！来るな！！来るなああああ！！！！！」

「ウラルッ！ウラル！！！」

カナは必死に抑えようとするが、ウラルは男の子でカナは女の子だ。
敵うわけがない。ウラルの手に飛ばされ、カナは地面に倒れ込む。

「きゃあああ！！！」

カナの悲鳴に心が変わったのか、ウラルの動きが止まる。じつとカナを見て、次に自分の手を見る。

「僕は・・・また・・・」

（また？またつてことは前にも？）

解らない、解りたくもなかった。僕は気を失つて、倒れ込んだ。聞こえたのは、知らない人の悲鳴と、カナの声だった。

「・・・第・・・n u c l・・・e u s・・・これより・・・」

どこからか、懐かしい声が聞こえる。まるで、この時を待っていたかのような、そんな、希望に満ちた声。そう、僕は・・・

（知っている？この声を、この・・・ あれ？なんだっけ？）

思い出せそうで思い出せない。絶対に知っているはずだ、だって、こいつらは

「おはよう、そして、お帰り。ウラル・カンターレ。ずっと、ずっと待っていた。この国を動かす君を、この国を、そして、世界をも変える、悪魔の申し子の1人。さあ、導いてくれ、この国の世界の未来を、私たちの人生を！！はは、あはははははっ！！！！！」

（こいつ、何笑ってたんだ？僕が、そんなこと出来るわけないじゃないか。は、馬鹿らしい）

でも、なんだか、懐かしい。やっぱり絶対に知っている。だって、こいつら僕の名前まで知ってるんだから。だけど、やっぱり思い出せない。何かを忘れてる。大事なことを、忘れちゃいけないことを。思い出さなくちゃいけないことを。

「そつだよ、クリリス・・・」

『欠片と夢』（後書き）

どうでしたでしょうか？

まだまだ、続くので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8421z/>

悲壮記憶 - ひそうかいり -

2011年12月28日08時48分発行